

ア マ モ の 球 化 物

中 沢 信 午

観光客でにぎわうドイツのハイデルベルク古城の一部に、ドイツ薬事博物館 (Deutsches Apotheke-Museum) がある。14の展示室にはドイツを中心として全ヨーロッパ各地から集めた薬草、動物および鉱物性の薬種類、さらに調剤器具、また各地の古い修道院の薬剤戸棚などを陳列公開している。創立は1937年で、第2次大戦により一部損害を受け、標本の紛失もあったが、再び集めて1957年に開館したという。

展示品の一つにピリ・マリーニ (pili marini) と記したものがあり、ドイツ文で次の説明がついている。

「ピリ・マリーニ：細長い葉と内包性の花を着ける海の植物 *Zostera marina* L. (アマモ) は平坦な海底に草原となって生育する。その葉が波にもまれて、しばしば繊維状にちぎれ、海中を漂いながら球形に集合し、岸に打ち上げられたものである。古くは甲状腺腫や皮膚病の治療に用いられた。」

標本は直径約7cmのほぼ完全に球形で、十数个を容器に入れ、その1個は切開して内部構造がわかるようにしてある。球は内部まで細い繊維の集合体で、阿寒湖のマリモに似ている。ただし褐色に乾燥しているので馬糞のようにも見える。またマリモに見るような内部の放射状構造はない。

このピリ・マリーニについては文献を通じて知っていたが、実物を見るのは初めてだった。実はこれがマリモの学名の起原となったものである。

ヨーロッパでは古来、山羊類の消化管内に生ずる球状の結石をエガグロピラ (aegagropila) と呼び、やはり薬用に供していた。この結石は多くの場合に毛の集合体が胃液によって固まったものである。それは動物が相手の、また自分自身の毛をなめることから、それを飲み込んだ結果である。この球状結石に似ていることから、海産のピリ・マリーニも、淡水湖沼産のマリモ類も一括してエガグロピラと呼ばれ、生薬として使用されていた。効果があったか否かは疑わしいが、海産のものはヨウ素

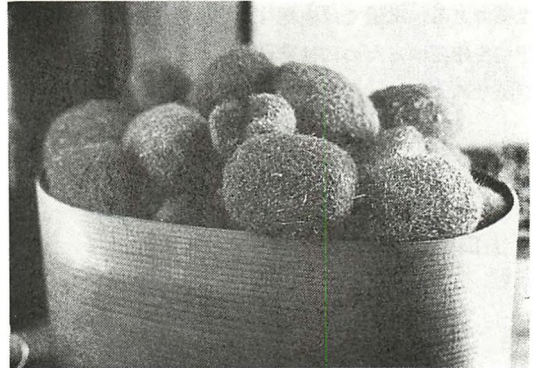


図1. ドイツ薬事博物館にあるピリ・マリーニの標本 (山崎裕氏撮影)

を含み、甲状腺の病に薬効があったともいわれる。

形態的な類似から、リンネは1763年の著「植物の種」第2巻1637ページで、マリモを *Conserva aegagropila* と命名し発表した。それが後にマリモ属の属名、または亜属名 *Aegagropila* となったのである。

類似のピリ・マリーニは地中海に面したフランスのリビエラ海岸でよく知られている (Schmidt, 1955)。しかしこれはアマモでなく、近縁種ポシドニア (*Posidonia oceanica*) の繊維が集まったもので、しかも多くの場合内部が中空になっている。またアフリカの東海岸からオーストラリア沿岸にかけては同属異種の *P. australis* の球化物がある (Schroeder, 1920)。

引用文献

- Linne, C., 1763. Species Plantarum, Tom. II.
Schmidt, H., 1955. Seebälle und ihre Entstehung. Natur und Volk 85, 277-283.
Schroeder, B., 1920. Über Seebälle. Naturwissenschaft. 8, 799-803.